

進撃のタクヤ

いっこうニイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

下北沢でバーテンダーをしていたタクヤ。気がつくると進撃の世界にいた。彼はエレンの母を救うことができるのか、果たして帰ることができるのか。駄文で初投稿ですがよろしくお願いします。

目次

壁の中のタクヤ	1
訓練で狂ったあと	41
その夢はこころの居場所、生命より壊れ やすきもの、何度も捨てては見つけ、安ら かに人間便器マスクをつけてそこに小便 するってのはどうつすか？	48

壁の中のタクヤ

東京都下北沢、そこに一軒のバーがあつた。

名前はバー平野。

閑古鳥が鳴り響く店内に、ただ一人の男がいた。

屈強な上半身、それと相對する様に痩せ細つた下半身、そして大きめなサングラス。

その男の名はタクヤ。

このバーで店員をしている。

そんな彼には今悩みがある。

このお店に客が来ない、という悩みではない。

この店のオーナーで店長でもある、平野源五郎という男が行方不明なのだ。

「まだ見つからねえか、」

彼ははあとため息を吐く。

警察にはまだ搜索届けを出してない。

それは彼の職業所以である。彼は実はゲイポルノ俳優なのだ。この下北沢において、

クッキー人が政治の実権を握ったことから、レズは上流階級とされ、ホモは下流階級、奴隷となった。

そのため、ホモの人権は保証されているとはいいがたく、まともに取り合ってくれない。

しかもこうしたゲイポルノ男優の行方不明は後をたたない。野獣先輩を始め多くのゲイポルノ男優が行方不明になってきた。そのため警察は、日に日に増していくゲイポルノ男優の捜索なんていちいちやっつけられるか！と匙を投げ、挙げ句の果てには冤罪事件まで起こしている。

それならばと、余計なことをしたくないタクヤは警察に頼らず、自力で探すことにしたのだ。とはいっても彼は、ギター練習や漫画の連載など数多の仕事をしているため、全く平野探しに着手していないのだが。

「一応ツイッター確認しとくか」

彼は徐に携帯を取り出して、ツイッターを開く。彼はSNSを通して平野を探そうというのだ。

「やっぱのってねえよな、」

しかし平野源五郎の情報は載ってない。

「いやーキツイっす」

再びため息を吐くタクヤ。

「あ、そうだ（唐突）そろそろお店閉めなくちゃ」

タクヤは唐突にそんなことを思い出した。ふと、時計を見ると、時刻は114514分になった。いた。

やべえよやべえよと思いながら、タクヤはカウンター席からドアは向こうへと出ようとす。

しかしその最中、タクヤはまた唐突にあることを思い出す。

「あ、やべ、今日床ワックスかけてたんだっけ！」

しかし思った時にはもう遅い。彼の体は空に舞い上がり、どしんと床に転げ落ちた。

体を強くあつたことにより、意識が朦朧とする。

「脊髓を強く打って体がピクピクしている、ちよーエロいぜー！」

そんなことを考えながら、意識が遠のく。しかしタクヤの視界には微かにウルトラマンが見えた

ような気がしたのだった。

金髪におかっぱ頭の、アルミンという少年は学校からの帰り道、不思議なものを見つけた。近づいてみると、それはものではなく、ひとであることが分かった。

「一体なんだろうこの人」

そういうとアルミンはその人の体を揺さぶる。

「大丈夫ですか？しっかりしてください！」

その声を掛けながらアルミンが揺さぶっていると、その男は意識を取り戻していった。

「ん？あれ、、、君は？」

「あ、よかった！気がついたみたいですね！さっきまで倒れていたんですよ！」

「あ、ありがとナス！」

アルミンに対しお礼を言う。

しかし今度はあたりをキョロキョロと見回し始めた。

どうも様子がおかしいと感じたアルミンは一応名前を尋ねる。

「あの、自分の名前分かりますか？」

そうすると、その倒れている男性はこう答えた。

「悶絶少年専属調教師のタクヤと申します」

「なるほどタクヤさんはバーにいたんだけど、気がついたらここにいたんですね」

「理解が早くて助かりナス！ そうなんすよ、参っちゃうすよ」

普段のタクヤは歳下であっても丁寧だ。それがたとえ小学生くらいの子であってもだ。アルミンはそんなタクヤを見て、おかしな恰好だけどもともそんな人だと思った。

タクヤはアルミンにこれまでのことを話した。自分がいたバーのこと、そこで転倒したこと、そして気がついたらまったくの未知らぬ場所にいること。

「え、でもここで倒れていたんですよ」

「いや、そうだけど俺が倒れたのは室内のはずだから、外じゃ無い。しかも外の景色もこんなドイツっぽくないし、、、」

「ええ、、、」

最初こそ信じられないアルミンであったが、タクヤの必死な口ぶりから、どうもこのおじさんは嘘をついていないのでは？と感じるようになった。

しかしタクヤの話が真実だとしても到底ありえないことであるとも思っていた。それはタクヤの立場からしても同じだ。

気がついたら見知らぬ土地にいる。しかもその風景というのは明らかに日本のそれではない。ヨーロッパ、いやドイツともいうべきだろうか。それにこのアルミン少年の容姿から見ても明らかだった。

アルミンの容姿は白人っぽいなあとタクヤは思った。

「もしかしてタクヤさんって、、、壁の外の世界から来たんじゃないかな？」

「壁の外？」

タクヤが尋ねると、アルミン遠くのほうを指さした。見てみると、巨大な壁がタクヤたちの街を囲っているのが見える。

（え、なにそれは。）

タクヤは率直に思った。

「この壁は、僕たちを巨人から守ってくれているんだ、でもそのおかげで僕たちは外の世界に行くことができないけどね。あ、でも調査兵団はいけるか、立体機動装置もあるから巨人を倒せるしね」

「ん？ちよつと待ってくれるかな？全然理解が追いつかない」

アルミンの言っていることがさっぱりなタクヤはうーんうーんと項垂れる。

自分の状況も意味わからないのに、さつきから謎の単語が話の中が飛び出してきて、そして言っていることが意味不明すぎて、頭がパンクしそう、マジ苦しい、という顔をしている。

その姿を見て、アルミンはタクヤが外の世界の人間、少なくともこの壁の中の人間ではないことを確信する。

（壁の外にいる巨人、そして僕たちを囲む大きな壁。こんなことこの壁の中に住んでいる人だったら誰でも知ってる常識だ！それをマジで知らないってことは、もしかして本当に壁の外の人間なのかな？）

そう考えたアルミンは期待の眼差しをタクヤに向ける。もちろんタクヤはそれにきづいていないのだが。

「おーい、アルミン！」

どこからかアルミンという声が聞こえた。アルミンはその声の方に振り向くと、見知った男女二人の姿が見える。

「あ、エレンにミカサ!!」

二人ともアルミンにとって大切な友人だ。男の方はエレンといい、女の方はミカサという。

「ねえねえ二人とも！この人すごいよ！この人外の世界から来たんだよ！」

「はあ？」

アルミンは興奮気味に二人に話しかける。しかしエレンとミカサはそんなアルミンに怪訝な顔を浮かべる。

「本当だよ！ねえタクヤさん！」

「ええ、、、いや急にそんなことを言われても。まずその外の世界がよく分からないんですけど（名推理）」

「あ、そっか、、、」

アルミンが食い気味に質問をするのだが、タクヤは困り顔でそう答えた。

「ていうかよ、アルミン大体この人が本当に外の世界の人ならさ、どうやってここまで来

「たんだよ？」

「あつ、、、、、」

たしかにそれは盲点だったとアルミンは思った。

「いやいやでもさあ！もしかしたら自力で登っていつてここに落ちてきたのかもしれないじゃない！」

「いやいやそれだと余計有り得ねーだろ！」

「づつ、、、、、」

アルミンは必死で反論するが、それもエレンによつて否定される。

「やっぱり外の世界っていうのはねーよ、、、、」

「私もそう思う」

エレンの意見にミカサも同調する。

その二人の様子を見て、アルミンはがつくりする。しかしそれではこのタクヤに起こつた摩訶不思議な出来事を証明することはできない。いや、もしくはタクヤは嘘を言っているのだろう、しかし先程の必死な姿を見たアルミンは彼が嘘を言っていないとそう感じた。

「しかしそれにしても、、、、」

そう言いながらミカサはタクヤをじっくりとみる。

そしてこう言い放った。

「このおじさんの格好が頭おかしい！」

「おじ→さん←だとふざけんじゃねえよお前！お兄さんだろオ！」

ミカサが言った言葉に呼応するようにタクヤが声を挙げる。

突然の出来事に三人は目を丸くする。

タクヤはミカサな言葉はアテフリだと思ったので、場を和ませようという思いでいったのだが、どうやら違うらしく、変な空気になってしまったようだ。そうギャグのつもりでいったのだ、怒ってるわけではないよ。

「あ、いや、えーと、言葉の綾つつーか」

ギャグとはいえ、子供に対して怒鳴りつけたような形になってしまったので、バツの悪そうにタクヤは弁明する。

しかしその姿がシニールであり、そして笑いのツボに入ったのかエレンは突然笑い出した。

「面白いなこの人！つかキレルポイントがおじさん呼ばわりに対してなのかよ！」

エレンが笑い出したためだろうか、釣られてアルミンとミカサが笑い始めた。

「お、おう、」

（なんか笑ってくれたようだ、場も和んだようだし、ネタの掴みはバツチリつてことかな？）

タクヤはその光景を見て一安心した。

アルミンとタクヤは二人にこれまでの経緯を説明する。

説明を聞いているうちに二人もタクヤの言うことは本当ではないかと疑いをもつようになった。本当は壁の外から来たのではないかと。

しかし確証はない。

最終的に、ここで倒れていたという点から、頭がバグを引き起こして、虚構と現実の区別がつかなくなったのではないかという結論に至った。

「まあ、タクヤさんの言ってることも信じられないわけじゃないけどなー」

「ええ、」

もちろんタクヤは不服という表情を浮かべている。

しかし今現在置かれている状況を見ると、マヂで頭のバグったのでは思っている。

実際はこの壁の中の住民のだが、頭がバグってしまった、下北沢でバーテンダーとし

て働いていたという幻を今の今まで見ていたと。

「もちろん今まで過ごしていた人生が幻だとは思いたくない。しかし今のこの状況を鑑みるとどうやってもうまく説明できない。

(いや一つあるな、異世界転移とか)

漫画家でもある彼は異世界転移を題材にしている漫画をたくさん知っている。もしかしたらその漫画のように異世界転移してしまったのではと。

(だがそれは漫画中での話、ありえねーよなあ、、、)

「ところでさ、タクヤさんはこれからどうするの?」

エレンがタクヤに尋ねる。

「え?これからってどういうことだ?」

「いや、これからの暮らしのことだよ、自分の元住んでいた場所とか覚えてるの?」

タクヤははつとなる。

ここにはバー平野がない。つまり寝床がない。

それに気づいたタクヤはがつくりとする。

その姿をみたエレンはタクヤを誘う。

「もしよかったらだけどき、ウチ来る？」

「ちよ、エレン!？」

エレンがタクヤを誘おうとした瞬間、ミカサがびつくりしながら止めに入る。

「うちは四大家族なんだよ！それにこんなおじさん、無理でしょ」

「おじ→さん←だとふざけんじやねえよお前！お兄さんだろオ!？」

「いやだつて、タクヤさんさつきまで倒れてたんだぜ？医者のお父さんに診てもらったほうがいいと思つてさ」

「それは、、そうだけど」

そういうと、ふとミカサはタクヤを見る。

タハハと気まずそうにタクヤは笑う。

ミカサが小さい時に両親は強盗に惨殺された。そんなミカサをエレンは助けくれたし、身寄りのないミカサをエレンは、そして家族は受け入れてくれた。ミカサにとつてエレンは命の恩人でもあり、そして大切な人であった。

ミカサは両親が殺されたこと、そこにエレンが助けてくれたこと、そして身寄りのないミカサをエレンたち家族が暖かく迎え入れてくれたことを思い出した。

そう、タクヤとミカサは年齢は違えど同じ立場なんだとミカサは思った。

そう思うとなんだか他人のような気がしないわけではない。それに彼の顔をよく見ると、なんだか東洋人の顔に見える。

(もしかして、彼は私と同じアツカーマン一族!?)

そう思ったミカサはタクヤに質問を投げかける。

「あのタクヤさんの苗字ってアツカーマンですか？」

ミカサはドキドキしながら聴くと、

「え？ 違うけど、」

タクヤは素で答えた。

どうやら違うようだ。

タクヤたちのいる街を囲うように聳え立つ巨大な壁。それを見上げるとなんとも言えない高揚感をタクヤは感じた。

「おっ、すっげえ」

感嘆な声をあげる。

エレンやアルミンを含め、この巨大な壁をまじまじと、そして目を輝かせながら見つめる人はいない。それは、生まれた時からあるものであり、当たり前のものであるからだ。

「なんとというか、スピリチュアル的なものを感じるぜ、、、」

ある種の感動を覚えるタクヤ。しかしそれと同時になぜこの巨大な建物を作ったのか疑問が残る。

「なあ、なんでこの街は壁に囲まれてるんだ？それから一体いつできたんだ？」

タクヤが尋ねると、アルミンが答える。

「いつできたかまでは分からないな、、、でもねこの壁はね、僕たちを巨人から守ってくれる有難い存在なんだ」

「巨人？そーいやさっきも同じこと言ってたな」

「巨人は恐ろしいんだ、この壁を超えて外の世界にいったものは大体食べられる」
ひえつとタクヤは感じた。

しかしそれと同時にここは安全なんだとタクヤは安堵する。

「壁の中って言ってもさ、それじゃあ俺たちただの家畜じゃねえか？」

「エレンー！」

しかしエレンが不貞腐れる。ミカサはそれに諭すようにツツコミを入れる。エレン

にとつて壁の中で暮らすということは、束縛されているみたいでなんとも耐え難いものなのだ。

「だから俺は外に行きたい！調査兵団に入る！」

エレンがそう言うのと、また聞き慣れない単語を耳にしたなとタクヤは思った。

調査兵団はいわばこの壁を超えて調査する兵隊である。先程の巨人に食べられる人たちは、これに該当する。

エレンが調査兵団に入ると言い出すとミカサは反論し、言いくるめようとする。しかしエレンもそれに対抗するので、ガキあるあるだなあとタクヤは思った。

壁の外の向こう側、三人の男がこの巨大な壁を見つめていた。

それぞれ奇怪な出立ちである。

男たちの名をそれぞれ田所、木村、三浦という。

「この変にでかい壁があるらしいですけど、壊しませんか？壊しましょうよ」

「いいぞこれー」

田所がそういうと、三浦も賛成する。

「あ、そうだ、おい木村、お前俺らが話してる時絶対壁のこと見てただろ」
すると突然三浦が木村に話しかける。

「え、いや、そんなこと、、なんで見る必要なんかあるんですか」
「うそつけ、絶対見てたぞ」

田所は木村と三浦の話を呆れながらに見つめる。またこれかと。

この下りは何回目だと思っていた。

埒があかないため、田所は二人を遮って話し出す。

「とりあえず、バッチェぶっ壊しますよ〜」

そう言う二人はコクンと頷いた。

そして三人は同時に自分の性器を触り出す。

「イクスギー！イク！イク！ンアッー」

射○すると同時に、みるみるうちに男達の体は巨大な体へと変わった。

普通のサイズから巨人へと変わったため、巨大なエネルギーが発生した。それがどれほどの影響を及ぼすのか。壁の中の大地に大きな地震としてもたらされた。

内地にいるタクヤをはじめとするメンバーは巨大な地震を感じとった。

なんだこれっと思っていると、しばらくすると地震は止まった。

「はっ、なんなんだ、地震つてやつか？」

エレンが言う。彼を含めこの街全員がこれほどの地震を体験したことはなかったこともあり、驚いていた。

やがて町中から騒ぎ声が聞こえ始める。先程の地震のことを話しているのだろうか。タクヤは思ったが、どうやら違うようだ。

建物の間を抜けた先の往来のほうに、人々が集まっている。一人の少女はある一点を指差して叫んでいる。

「行ってみよう」

エレンの一言で、全員が往来の方へ向かう。しかしアルミンは気になったのか、小走りで一足先に往來へかけて行った。

一足先に見たアルミンは驚愕の表情を見せる。

「おいアルミン、一体なにが？」

エレンがアルミンに声をかける。

それと同時に、この場にいる全員が信じられない光景を目にする。

この壁を超える大きさの巨人が3体見える。

「う、うそだろー！」

これを見た住民たちの間で、あちこちから悲鳴とも呼べる声が聞こえる。

タクヤも思わず固まる。

「じゃけん、ぶっ壊しますねえ」

一体の巨人が声をかけると、それに呼応するかのようにもう2体も壁を壊し始める。

壁の壊し方はいたってシンプルだ。

壁にキックをする、それだけ。

だがそのシンプルさゆえにとんでもない。

壁をキックしたことにより、破片が飛び散り、街のいたるところに雪のように降ってきたのだ。

「うわあああ」

「たすけてー!!」

壁が破壊されたことにより、街はパニックとなった。全員が巨人とは反対方向へと逃げ出す。

ただ一人を除いて。

「エレン！」

ミカサが走り出すエレンに叫ぶ。

「壁の破片が飛んでった先に母さんが！」

エレンはそう言うと言目散に走り出す。ミカサもエレンが心配なのかエレンの後を追う。

アルミンはそんな二人を見ながら固まっていた。想像を絶するこの状況に頭が追いつかず、体が動かないのだ。プルプルと震わせながら、タクヤのほうを見る。タクヤ自身も震えていた。

（ウツソだろ、お前）

これはホテルの前で震える所謂武者振るいとは違う。タクヤもそう感じていた。しかしふと不安そうなアルミンを見ると、震えは一気に吹き飛んだ。タクヤは大人である自分がしつかりとしなくてはと思い、アルミンに向けてこう言った。

「俺はあの二人を連れて帰る！アルミンは一人で逃げるな？」

アルミンは一瞬僕もと思ったが、口にすることは出来なかった。

アルミンは静かにタクヤに頷くと、一目さんに駆け出した。

それがある程度に見届けてから、タクヤは改めてミカサとエレンのほうへ駆け出し

た。

エレンとミカサは壊れた家の中にいる母を発見し、必死に助けようとしていた。しかし子供である彼らはなかなか助けられることができない。

大きな柱がカルラを挟み込み、しかも彼女は足を骨折していても逃げ出すことができない。

「エレン、ミカサを連れて逃げなさい！」

カルラは助けに来たエレンとミカサに逃げるように促すが、逃げる気配はない。

「逃げたいよ俺も早く！だから一緒に逃げよう！」

エレンとミカサは必死に柱を持ち上げようとすが重くて動かせない。

「どうして母さんの言うことが聞けないの！最後までいい言うことを聞いてよ！」

カルラは必死に叫ぶ。だがそれでもエレンとミカサは止めようとしめない。なんと少しでも母を助ける、その意思がエレンたちを動かさし続けていた。

しかし一刻の猶予を争う。エレンたちがいる間に、一つの巨人がドシンドシンと足跡を立てながら近づいていた。

「俺も仲間に入れてくれよ！」

メガネをかけたサラリーマンスーツを着ている巨人だ。まだ距離はあるものの、明らかに自分たちをターゲットにしている。そしていずれは追いつかれることを感じとつた。

死への恐怖により、

「あつ、、」

この場にいる三人が思わず言葉を失った。

「エレン、ミカサ早く逃げなさい!!」

カルラが叫ぼうともエレンとミカサは手を止めようとしなない。

(このままじゃ三人とも)

カルラの頭の中をそうよぎった。

絶体絶命だと感じたとき、カルラの視界に一人の男が入った。

頭がデカく網目状のシャツを身に纏った鍛え抜かれた体、そして貧弱な下半身。どこからどう見ても変な格好をした変質者風の男が目の前に立っていた。

「おまたせ」

そう言うのとタクヤはニカツと笑った。

「タクヤさん!!」

エレンとミカサは声をかけた。カルラは、どうやら彼がエレンとミカサの知り合いのようだと察した。そして目の前の巨人もそうだが、別の意味で心配になった。

「今助けてやるからなあ〜」

そう言うのとタクヤは二人が持ち上げられなかった柱を軽々と持ち上げる。それに驚きつつも、二人はカルラをなんとか引き摺り出すことに成功した。

「エレン！ミカサ！」

「母さん!!」

「、、っ」

三人は涙を流しながら必死に抱擁する。一時は死を覚悟したカルラだったが、こうして生きられることができ、大粒の涙を流す。

エレンやミカサも無事にカルラを助けることができ、同じく泣きながら抱擁した。

この親子愛にタクヤも思わず涙ぐむ。

(助かってよかった、……)

しばらく抱きつづけると、カルラはタクヤのほうに目をやり、深々とお辞儀をする。とはいっても足が使えないため、お辞儀みたいなかたちではあるが。

「ありがとうございます、この度はなんといいたらよいか」

「ありがとうタクヤさん！」

「ありがとう」

カルラが礼を言ったのに続いて、エレンとミカサも礼を言う。

「お礼なんか必要ねえんだよ！それより早く逃げないと！」

そう言うタクヤは遠くに目をやる。

壁が壊れたことにより、外にいた巨人が次々と溢れ出る。

その中の一体、メガネをかけたスーツの巨人がドシンドシンと足跡を立てながら近づいてくる。先ほどよりさらに近づいており、もはや一刻の猶予もない状況だ。

「おれも仲間に入れてくれよー」

そう言いながら、さらに近づいてくる。

タクヤは何か覚悟を決めたのか、三人の方に向き、話しかける。

「エレン、ミカサ、お母さんを連れて逃げれるか？」

「う、うん」

「俺が囹になる、お前たちはその間に逃げろ。」

「そんな！タクヤさん！」

「どのみち全員は助からねえ！だから逃げるんだ」

「そんなんっ、」

「せつかく助けたんだ、その命無駄にしないでくれよっ、」

「エレン！あの人の言う通りにしなさい。」

「でもっ、」

そう言うときエレンはタクヤの方を見る。

「安心しろよ、エレン。俺が死ぬわけないだろ？死ぬ寸前まであいつを痛めつけてやるんだからな」

タクヤは笑っていた。

「タクヤさん、すみません私たちにはなにも」

カルラが申し訳なさそうに呟く。

「いいんですよ、奥さん。その代わり長生きしてくださいね」

そう言われたカルラは深々とお辞儀をする。

「さあ早く逃げる！」

タクヤがそう言うのと、エレンとミカサはカルラを抱えた。エレンはタクヤに背を向け、

「必ず生きて帰ってこいよ」

と言った。

「つべこべ言わずに行けホイ」

タクヤがそう言うのと三人は進み出した。

「エレン、お母さんはな、大切にしろよ」

タクヤは三人を顧みずに、背中で語った。

タクヤ自身自分の母からネグレクトを受けていた。だがそんなタクヤでも母を大切に
にする思いはあったし、実際に行動していた。

だからだろうかエレンやミカサの必死で母を助け出そうとする姿勢がタクヤの心を
打った。

普段のタクヤであれば、あつたばかりの少年を助けることはしないだろう。だが助け
た。

ガラにもねえよなあとタクヤは頭をぼりぼりとかきつつ、巨人に向き合う。

「お前らばかり楽しい思いしてんなよ」

巨人が雄叫びのようなものを挙げる。

「だまれ！殺されてかお前！なんだその偉そうなすわわ!!」

そう言うのとタクヤは、巨人に突っ込む。

しかしやはりただの人間。

タクヤは巨人に踏み潰されてしまった。

ーっっっーっっっーっっっーっっっー

う、う、うるさい

静かにしてくれ

タクヤは暗い闇の中にいた。タクヤ自身仰向けの状態で、ふわふわと浮いているように感じた。

辺り一面なにも見えない状態だが、不思議と居心地が良い。

(マジエロいぜ、じゃなかったマジ気持ちいい)

タクヤは不思議といつまでもここにいたいと思った。

(気持ち良すぎて眠くなるぜ)

ついうとうとと、眠気が襲う。しかしいざ寝ようとすると、決まって耳鳴りのようなもので、タクヤは眠気から覚めてしまう。まるで彼を寝させないように。

不快感を露わにするタクヤだったが、ふと耳鳴りの方に耳を傾けていると、どこかで聞いたことのある歌が聞こえた。

——ウルトラマンが拉致されて——

(!?)

タクヤは思わず驚く、この歌詞はかつてタクヤ本人が書いた怪文書と一致していたからである。

(どうなってやがんだ、、?)

不思議な感覚のタクヤ。ふと気がつくと仰向けの状態から体を起こしていた。それと同時に耳鳴りの音がしだいに大きくなる。

(まだ俺にはやることがある気がする。)

タクヤはふとそう思った。

それに呼応するかのように耳鳴りは次第に激しさを増していく。

——ウルトラマンが拉致されて——

——腹筋ボコボコにパンチ食らって——

——胸のランプが点滅すると あと3分で力尽き果てる ——

——その時のウルトラマンの苦しむ姿にドキドキするって——

「ヒーロー凌辱だぜ！」

タクヤはその耳鳴りと同時に叫んだ。

すると辺り一面、いや、タクヤの体真っ白い光につつまれた。

駐屯兵団のハンネスは急いでエレンのうちへと向かった。

「くそつ、急がねえと、、！」

その少し前に彼は、ミカサとエレン、カルラと出会った。

「頼むよ、ハンネスさん!!まだ一人!タクヤさんが!」

「お願いしますハンネスさん!」

「コクツコクツ

「た、タクヤさん?」

最初は無事に三人生き残ったことに安堵していた。しかしその束の間、三人からタクヤと呼ばれる見知らぬ男性の名を言われ、首を傾げる。

(聞いたことが無い名前だ)

しばらく考えていたハンネスだが、エレンとミカサに体を必死に揺らされて、ふと我に帰る。

「わ、わかった必ず助け出す!」

そう言うとうとハンネスは急いで飛び出す。

(今は何者か関係ねえ!!一人でも多くの住民を助け出す!)

ハンネスはそう決心しながら、エレンのうちへと向かった。

「うおおお、なんだこれは!?!」

タクヤは水溜りに映った自分の姿に驚く。

その姿はまるでウルトラマン。しかも自分の体が通常よりも大きくなり、先程の巨人

を見下ろす形となった。

「なんだか分からねえが今なら勝てる気がする、、、」

そう言うのとタクヤは徐に鞭を取り出す。どうやら彼の愛具である鞭も大きくなつてようだ。

「死ぬ寸前まで痛めつけてやるからなあ?」

タクヤは巨人に向けてニコリと笑った。

ハンネスいや、町中のみんながその光景に唾然とする。

突然赤と白に覆われた巨人が出没したのだ。自分たちを囲う大きな壁やさきほどの三体の巨人より大きくは無いが、それでも街中にいる10メートル巨人よりはるかに大きい。

その巨人がなにやら変な動きをしてるな、と遠くで見ている多くの人はそう思った。しかし近くで見ている人はこの巨人がなにをしているのかがわかった。

ハンネスはこの巨人の近くにいた。

「エレンの家に来たはいいが、なんだこの巨人は!？」

ハンネスが見た光景は壮絶だった。

「全然ユルケツじゃんお前!! そんなユルインかよ!？」

そう言いながら巨人は鞭でメガネサラリーマン巨人を引つ叩いていた。

「あああああいいいいいいいい!! 痛い痛い痛い!! 痛い痛い痛い!! 痛い!!」

対する巨人のほうも悲鳴を上げていた。しかししばらくすると体力が尽きたのか、体が消えてしまった。

「よし、次いくぞー」

巨人が消えてしまったためか、今度は別の巨人へターゲットをずらす。

(まだまだたくさんいるな、、、 どんどんさばかねえと、、、)

タクヤはそう考えながら、次々との巨人を見つけては鞭ではたき続ける。

その鞭捌きはなんとどうか、

その光景を見た人は、みんな一堂に綺麗だと思った。

通常は、立体機動装置をつけたものでさえ、満足に巨人を狩ることができないのに、タクヤは次々と巨人を狩っていた。

それを見ていた群衆たちも、初めはタクヤに恐怖こそしていたものの、救世主だといわんばかりに大きな歓声を上げた。

「うおおおお、がんばれえええ」

「巨人たちをたおしてくれえええ」

「まけるなああああ」

「神様ああああ」

最初は悲鳴だったはずが応援に変わり、タクヤは思わず困惑する。

(ええ、これが一転攻勢ってやつか?)

しかしタクヤも悪い気はしなかった。

自分を応援してくれている、中には自分を神様だと言ってくれている人がいるのだ、これは期待に応えなくては、とタクヤは思った。

ドンドン巨人を消滅していくと、やがて最後の一体を発見した。

「おじさんやめちくり〜(挑発)」

巨人がそう言うと、タクヤは思わずキレる。

「おじさんだ?!?ふざけんじゃねーよ!お兄さんだろ!!」

そういうとタクヤは巨人に鞭を打つ。

「わかったわかったわかったよもう!」

なにが分かったのか、タクヤは思った。

三浦も賛成する。

そして三人は元のサイズへと戻り、立教大学へと戻った。

「ちっ、あの巨人たち急に消えやがった」

タクヤは唇を噛む。この事件の原因となったあの巨人たちに鞭打ちをしたいと思っていたのだが、できなくなってしまう、落胆する。

やがてしばらくすると、胸のカラータイマーが鳴り響く。

「うお、どうすんだこれ！」

思わず慌てる。通常のウルトラマンであれば、胸のカラータイマーが鳴けば空に飛ぶしかない。タクヤは必死でジャンプするも飛べない。タクヤはとてつもなく焦る。しまいにいたってはシユワちゃんの名前を叫ぶ。

「おーい！これじゃゼットンエンドだぜ！」

やがてしばらくするとタクヤの意識は途絶えた。

タクヤの意識が途絶えたことで、変身は解かれ元のサイズに戻った。

自分たちを救った巨人が突然消えたことで群衆は騒然としたが、街中の巨人が消えた

ことにより、やがて大きな歓声となった。

助かったという意見もあれば、ありがとうという声もあがる。いずれにせよ、今生きていられる喜びを皆んなで分かち合った。

「はっ!?!」

タクヤが目覚めた先に写っていたものは、病院のベッドの上だった。

なぜここにいるのか混乱するタクヤ。

やがてこれまでのことを思い出した。

「そうだ確か俺はあの時、」

胸のカラータイマーがなって気を失った、しかし今は病院にいる。どうやら誰かが助けてくれたってことか。ヒーロー陵辱されなくて良かったぜ、とタクヤは安堵した。

しばらくすると、病院のドアがノックされ、人が入ってきた。

タクヤはその人を見た瞬間驚きの声を挙げる。

「ひ、平野店長!?!」

「ふおおおおお!元氣そうじゃのう、タクヤ!!」

なんと入ってきた人物は、タクヤが探していた人物、平野源五郎だった。

「な、なぜ平野店長がここに!?!」

「それは、お前が倒れたと、聞いてのう、、、」

そう言うのと平野は笑う。タクヤはというと、やっと平野に会えたと言うのに、今までこのことと重なり混乱していた。

「いろいろと積もる話があるんじゃないやがのう、ま、とにかくタクヤ。よく生きてこれたな!!」

「っ、、、」

自分は確かにあの時死ぬと思っていた。しかし今こうしていきっている。なんとか死なずにしかも平野に会えたことで喜びに震える。

タクヤと平野が室内でしばらく談笑していると衝撃の事実がわかった。

それはタクヤと平野どちらも突然この世界に飛ばされたことだ。やはり下北沢からの異世界転移だとタクヤは確信する。

「そういえば店長は今の今までなにをしてたんスカ?」

「ふむ、わしは今は調査兵団で副団長をしている」

それを聞いたタクヤはやっぱりすごいつすねえと言った。

しかし平野は押しつけられたんだよと謙遜した。

しばらく時間を忘れて話し込んでいると、もういいだろとばかりに平野は切り返す。

「少し疲れたじやろう、まだ休んでいろ」

「そうさせてもらいます」

平野はそう言うのと、先を立とうとする。しかしタクヤは呼び止める。

そうだこれを聞くのを忘れていたとタクヤは思った。

「店長、元の世界に帰る方法ってあるんですか？」

タクヤがそう聞くと、平野は首を横に振る。

タクヤが思わずガツカリすると、平野は口を開く。

「しかし無いわけでは無いとわしは思っている。特にこの世界という壁の外にはなにかしらのヒントがあると思っっている。」

「ヒントつすか？」

「ああ。だからわしは外へ行くことができる、調査兵団に入った!!」

そう言うのと平野は手を心臓に掲げる。

その姿は惚れ惚れするくらい素晴らしいものだった。

それにタクヤに火がついたのか、こう言った。

「店長、俺も、調査兵团に入りたいです！」

タクヤがそう言うのと平野はコクリと頷く。

「うむ！ぜひ入ってくれ！タクヤのウルトラマンになる能力はきつと役に立つはずじゃからのう！」

こうして俺は調査兵团に入った。

あのエレンアルミンミカサたちとの出会いから一年が立ち、今は兵士長？っていう役職についている。正直俺には荷が重いと感じていた。学校すら出ていないし、ただ巨人の力を持ったただけだし、おまけに店長からのコネもあるし。正直最初は疎まれていただろう。

しかし最近はやうやく認められていると感じるようになった。

「兵長？ボートしてますか？大丈夫ですか？」

「大丈夫だって安心しろよー」

コイツの名前はペトラっていう俺の部下っつーか秘書っつーか、お世話係みたいな感じだ。かなりかわいい女の子で俺がホモじゃなくて、ノンケだったら彼女に惚れてただろうなと思うくらいカワイイ。」

「ちよ!!なに言ってるんですか兵長!?!」

どうやら聞こえていたらしい。口に出していたか。どこから聞こえていたのだろうか。ホモとかノンケとか聞かれてたらやべーなと思いつつ、ふとペトラの方を見ると、ほんのりと顔が赤い。

これはちよつとキレてるのか。やべーと思いつつ、頭を下げると、ペトラは必死で否定した。

気を遣ってるのだろうか、俺はありがたいと思いつつ、足を進める。

今日は待ちに待った壁外調査だ。一步一步確かに進んでいると感じた。

まだまだ全然外の世界に帰れるヒント見つかったねーけど、今日も精一杯生きてる!

まだまだ俺の冒険は続くってことかな? あーはやく下北沢にカエリテー!!

訓練で狂ったあと

投稿者： ビルダー拓也

先日店長と病院で会って、帰れる方法聞いたら、無いってはっきり言われた。でも店長によれば手がかりがあるかもって思ったらしく、調査兵团に入って入ったらしい。俺は頼れる人がいないもんで、どうするか考えてたら店長から、調査兵团に入れよというお誘いのメール。これは行くしかねえぜ！店長からのコネもあるしな！ってことで調査兵团の基地についたんだけど、まず目についたのが、鍛えられた屈強な男たち。オスの匂いをぶんぶん発してるもんで思わず俺のも→っちやいそう。一応ここではノンケで通してるからバレないように隠すのは、マヂでキツかったぜ。

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。しばらくしたら案内役の若い男の子二人がきた。一人はジャーニーズ風のイケメンでもう一人はインテリ風のイケメンだ。どちらも訓練？が終わったあとだったためか汗がすごい。オス特有のくっせー匂いを撒き散らしているもんだからすげーエロいぜ！その二人から調査兵团について色々紹介された。なんでもロープや剣を

使つて巨人を倒すらしい。俺はてつきり巨人をロープで縛るのかと思いきや、なんとロープを使つて空を飛ぶらしい。マジすげえぜ！調査兵団の移動は基本的には馬を使う。おいおい俺は人間を馬にして乗つたことあるけど、リアルな馬は乗つたことがないから不安だぜ。でもそんな俺にイケメン君は笑顔で「大丈夫ですよ」と声をかけてくる。マジやべえ、その笑顔で何人の男をオトしたんだ。

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。不思議なことにここにきてからまったく欲がなくなつた。すつげえイケメン君みても俺の棒は元気にならない。ここに来てから、そういう行為とはご無沙汰だからすつげえ溜まつてるはずなんだけど不思議と→たない。マジでやべえぜ。俺ももう歳つてことなのか？でもこれじゃ商売ならないよ。調査兵団に入る前にそういうゲイの店に行つたけど、やはり→たねえな、むしろ女の方が若干→った気がする。ウツソだろ俺もしかしてノンケだったりするののか。

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。調査兵団ですつげー面白いものを見れたんだけど、それと同時に俺はここでやつていけるのか心配になつたぜ。今までウリ専でやつてきたからさ、いきなり軍人つてのも無理じゃねえか？そりゃ肉体には自信はあるけどさ。でもこの男くせー環境だつたらいけるかもな。匂いだけでご飯三杯はいけるぜ！

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。お昼になった。俺はなんだかんだこの時間を楽しみしてたんだぜ？でもよ出てきたのは、かってえーパンと薄味のスープ！そりやねえーぜ！でも他の兵士たちをふと見ると、みんな美味しそうに食ってんだよな。まああれだけ動いてりやな、空腹は最高の調味料つてやつかな？俺は近くにいたイケメン君に声をかけ、ご飯をあげた。別にやましい気持ちじゃねーぜ？ところがそいつ近くにあった女に飯を譲りやがった。マジでありえねーぜ。人の餌でいい格好すんじゃねーよ！俺の尊厳を踏み躪られた気がしてイケメン君に襲い掛かろうとしたんだけど、貰った女の子がすっげー笑顔で、しかもお礼を言うもんだから、俺も怒るに怒らなかつたぜ。しかもその女の子はちゃっかり俺の分を平らげてた。

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。午後からは俺も一緒に訓練することになった。あとで気づいたんだけどどうやら俺の肩書きは訓練生というらしいぜ。周りの連中なんてみんな10代の子ばかり。正直俺すっげー浮いてる！周りからすっげー視線を感じるぜ。いいぜ、どうせ俺は露出淫乱ビルダーなんだ。資産というものは慣れてるのさ。訓練生というのは通常う○こ色のジャケットに白のズボンを履くんだけど、俺は網タイツに短パンという格好だぜ。なんでも店長がコネを使って融通をきかせたらしい。訓練の内容はいたってシ

ンプル。対人格闘技ってやつらしいぜ。2人1組になつて戦うらしい。俺はさっきのイケメン君を探すんだけど、別の奴と組んじまつたらしい。残念だぜ。

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。その後も対戦相手探すんだけど、全然見つからねえ。ていうか明らかにみんな俺のことを避けられてる気がする。まあ俺自身避けられることには慣れてるから別になんとも思わないぜ。でもそれでサボつてるって思われるのはキツいな。しかも陰で俺のことを変態と呼んでるのが聞こえた。否定はしねえぜ。でもこのまま何もせず突っ立ってるのもあれだからイケメン君を探すんだけど、やっぱり逃げられる。サービスするぜっていうても逃げられる、ツイテねーぜ。しばらく突っ立ってたら、声をかけられた。見るとさっき俺が飯をあげた女の子だった。さっき飯をくれたお礼だよと言うので、相手になつたぜ。俺は普段ジムで鍛えてるから女の兵士とはいえ楽に勝てると思つてたら、普通に負けたぜ。マジつええ。特に彼女の関節技は俺の頭から前立腺にかけてを激しく刺激するからマジたまんねえ。俺が絶叫という名の喘ぎ声を放つと彼女がより力を加えてくるので、俺の穴という穴からすべての液体を根こそぎ絞られる、そして淫獣の出来上がりだ。体鍛えてるだけじゃ強くなれねえってことに改めて思ひ知つたぜ。その女の子も俺が見かけよりも弱いんでぼう然としてた。周りのイケメン君たちも含めて皆んな一斉に見てたから、恥ずかしさもあつたけど、それがまたす

げー気持ちいい。それから訓練が終わるまでその女の子にみっちりやられたぜ。容赦が無さすぎてマジやべーぜ！俺の母親と違うベクトルでやばさだ！

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。そんなこんなでようやく地獄の対人格闘技が終わったぜ。でもその対戦相手の子と仲良くなったから良かったか。その時その子から案外普通の人といわれたぜ。俺はオンオフは切り替える男だからな。ウリ専の時は乱れるけど、そうじゃないときは常識人だ。去り際に名前聞かれたんで、悶絶少年専属調教師のタクヤですと言いたかったんだけど、店長からタクヤアツカーマンと名乗れと言われたんでそう答えたぜ。俺もその子に聞いたら、ペトラって名前らしい。俺は普段女と会話しねーからな。話すのもやるのも男だったから、久しぶりに女と話してこれは悪くねえなと思った。虐待おばさんから虐待されてから女が苦手になって、男に走った俺だけど、こういう子がいれば俺もホモにネタにされることはなかったのかなと思うぜ。

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。夕飯も昼飯と同じで、かってーパンと薄いスープ。マジやべーぜ。でもさすがにお腹空いてたんで夢中で食った。ペトラがチラチラ見てたけどさすがにもうやらねーぜ！したら今度は隣の中年男性が話しかけてきた。てつきりお誘いかと思つたら全然違かった。そいつはやっかみっぽかったけど、体が鍛えられてすっげーセク

シー！しかもたまにベロとか出してきたりして、フェ○すごそうですっげーエロい！俺もその人には敬語で話してただけど、実はこの人俺より歳下でしかも10代、すげー驚いたぜ。そのことを話したら、そいつシヨックを受けてた、すっげーかわいい。老け顔だが10代のためか年相応の幼さが見れるんだよな。そしてペトラはというとツボに入ったのか笑ってた、失礼な奴だぜ。でもそれを皮切りにみんな笑い出して笑いの渦ができた。イケメン君も笑ってて、その顔がすっげーエロかったから俺のリングマラも→つかと思つたら→たねえ。参ったぜ。でも皆んなの俺への視線が少し和らいだ気がするからよしとする。

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。飯も食い終わり、いよいよ待ちに待ったお風呂の時間だ。ティーンのイケメン君たちの裸が見放題つてんで、俺もテンションが上がり。俺は服を脱ぎ去り、ジムで鍛え抜かれた肉体をこいつらに見せつける。訓練生の男たちはマジマジと見つめてくるんでめつちやコーフンする。先程の老け顔のオルオが「すごい肉体すね」と声をかけてきた。顔は正直好みじゃないけど、歳のわりに鍛えられててすっげーエロい！体触って良いですか？つて言われたんで、もちろんオーケー。肉体を全面に出すと、こいつ乳首ばかりさわってきやがる！オルオの指が触れるたびに→ってくるし、喘ぎ声も出そうになるしマジでシャレになんねー！その後は仲良く風呂に入って汗を流すんだ

けど、ティーンの本をじつと見ても全然→たねえ！やっぱりおれも歳なんかな。

投稿者： ビルダー拓也

続きだぜ。寝場所はなんと個室。俺途中から訓練したわけだから部屋開いてねーんだとさ！ぜってーウソだろ！でもそのほうが、気楽でいいかも。周りに気にせず息子を愛でることが出来るしな！俺は先輩やセ○フレの顔を浮かべながらいじる。ところが全然→たねえ、俺の息子。まあ、早く寝ろって言ってるんのかもしれねえな。俺は睡眠薬と筋弛緩剤で強制的に眠りについた。

その夢はこころの居場所、生命より壊れやすきもの、何
度も捨てては見つけ、安らかに人間便器マスクをつけてそ
こに小便するってのはどうっすか？

現在タクヤ達の住む下北沢共和国を支配しているのは、クツキー人と呼ばれるレズた
ちだ。彼女達は強大な軍事力を持っており、それを駆使して瞬く間に下北沢全土を支配
下に置いた？

そして支配者層である彼女達は、下北沢の原住民であるインム人を虐げている。タク
ヤや平野をはじめとするホモたちも彼女たちから迫害を受けていた。

下北沢を実効支配しているクツキー人たちは、やがて下北沢だけでは飽き足らず、今
度は異世界にも目を向け始めた。

彼女たちの標的となった世界、それこそが進撃の巨人の世界なのである。

彼女たちは手始めに、はるか東の国である、ヒイズルから、西へ向かって次々と侵略
し、現在では中東連合などの東の全部の国、そしてマールレの一部までを支配下に置いた。

未だかつてクツキーからの大規模な軍事攻撃を受けていない場所は、パラディ島の壁

の中のみとなっている。

現在クツキーからの支配を受けていないマーレでは、クツキー人からの支配を逃れようと、東から様々な民族が難民としてやってきた。

そんな難民の人々は、主に二つのグループに分けることができる。

一つはまだ軍事を有するマーレ軍と共にクツキーと戦う人達、二つ目はクツキーの支配から逃れ、ただ安息の地を求めて、住む場所をかえている人達だ。特に後者の場合は、マーレの一部の地域が占領されたという話を聞いて、ここもいよいよ危ないということで、マーレから脱出し、パラデイ島へ避難するという計画が出てきている。またグループ内には少数ながらエルディア人もおり、そんな彼らには、自分たちの祖国ともいうべきパラデイ島も元々関心があつたのである。そして同じエルディア人であれば、たとえ壁の中と外とで違いはあるにせよ、もし自分たちが難民としてやって来ても、受け入れてくれるだろうと考えていた。あの巨大な壁の中なら、クツキー人でも入つてこれないだろう、大丈夫だろうという安易な考えが彼らにはあつた。

ところかわって壁の外。

何人かのグループが歩いていた。

「ジーク隊長、本当に成功しますでしょうか？」

その中の一人、マルセルという少年が尋ねる。

「成功の可能性は低いだろうな……だがなんとしてでもやり遂げなくちゃね」

少年の問いにジークという、髭面のおっさんが答える。

パラディ島の壁の外を歩いているのは、この隊を指揮するジーク、そしてメンバーの
まとめ役でもあるマルセル、アニ、ピーク、ライナー、ベルトルト、そして元ホモビ男
優で、現在はマール軍の訓練生のゆうさくとひである。

ゆうさくとひではタクヤと源五郎と同じインム人であり、彼らと同様、進撃の世界に
転移してきた。初めは色々あったが、現在はライナー達と同様訓練生として日々楽しく

?生活している。

ゆうさくとひで以外のジークやマルセル達はマーレに住むエルディア人であり、今回の彼らの任務は壁内調査と彼らと外交関係を築くこと、そしてできればエルディア人の難民申請の許可を得ることである。

彼らが派遣されたのは、マーレ人が直接出向くよりも、同じエルディア人のほうが有利に動くだろうと考えた末であった。

ちなみに、彼らは全員巨人の力を有している。

「ぬああああああん！壁まで遠すぎー！！！」

ひでが叫び声の文句をあげると、アニが蹴りを入れる。

「ひで！あんたうっさい！」

「あー！もうやだー！！！」

アニから喰らった蹴りをくらい、のたうち回るが、さすが鬼耐久のひでである、すぐに体制を戻した。と同時にまたアニから蹴りを喰らわされる。

「アニちゃんやめちくりー」

おちよくってんのか？アニは青スジをピクピクしている。

さつきからひでが叫んではアニが蹴りを入れて黙らせようとするのだが、全然静かにならない。

「兄（アニ）さん許して！ああー壊れちゃーう」

しかもこのように無駄に煽ってくるため、アニのストレスメーターは限界よ！

ひでたちが来る以前はクールビューティで通っていたアニだが、ひでが来てから、クールビューティの面影はどこへやら。

ちなみに彼女のクールな一面に惚れていた一部の訓練生は彼女のそのような一面を見て、彼女に恐怖し、今度はピークファンクラブを結成したという。

しかしアニに恋するベルトルトは、むしろ彼女の違う一面にますます惹かれ、そしてそれを引き出したひでに感謝しつつも、蹴り続けられるひでを見て羨ましく感じていた。

やがて蹴られまくっているひでから、ライナー助けて！という声が聞こえた。

ええ…なんで俺が？とライナーは思ったが、助けを求められた以上、しょうがないので、アニの前に立ち塞がる。

ほっとけばいいのになんてバカ正直なんだ、とピークとマルセルは思った。

「…おいアニ、そろそろ蹴るのをやめたらどうだ？」

「なに、ライナー。あんたが代わりに蹴りたいの？」

「え、いや…」

「10発ぐらい一気に行くから…」

え、そんなにいくの？そんなこと言われたら…

「いや、どうぞどうぞひでを蹴り続けてください！」

ひでを差し出すしかないじゃないか…

「ライナー助けて！」

単純な格闘技術じゃアニには敵わない、すまんひで。それにお前の耐久力なら大丈夫じゃないか。今までずっととされてんだから…

ひでの絶叫があたり一面に響き渡った。

ゆうさくはこの光景を見てホツとしていた。なぜならひでの叔父である葛城蓮がない今、彼を止められる人物がないからである。

同じインム人として止める役割は自分に回ってくるだろうと考えており、そして果たして自分にコイツを止められるか不安だった。

しかしありがたいことに、このアニという自分よりも若い年下の女の子
によって自分の役回りは肩代わりされることとなった。

「罪悪感感じるんですけどよね？」

「え、いや、あまり…むしろありがたいです」

「ははは、ひでは相変わらず元気だねえ」

「笑い事じゃ無いですよ、隊長」

笑うジークにため息しながらマルセルが答える。

「ゆうさくはともかく、ひでがお荷物になることくらい分かりきっていたことでしょう
？なぜ連れてきたんです？」

「僕も同感です、ひでを連れてく意味がわからない」

「ここにいるみんながそう思うよね…」

続けてマルセルが疑問を投げかける。それに続いてベルトルトやピークも同調する。

マルセルやピーク達はマーレ軍の中でも指折りの戦士達だ。これまで厳しい訓練と

競争を勝ち抜いてきた。

そんな時にひでとゆうさくは、2ヶ月ほど前に、訓練生としてやってきた一般のホモビ男優だ。年齢も彼らとは違い、ジークとほぼ同年代だ。

しかも彼らの成績はドベであり、おまけに歴代最低点を叩き出したし、あのポルコでさえもドン引きするほどだった。

そんな歴史上最高ともいえる劣等生でもある二人が、なぜ自分たちと一緒にこの重要な任務につくのか、疑問だった。

この我々の存亡を賭けた重要な任務に、ゆうさくはともかく、問題児であるひでを同行するのか……

マルセルの質問にジークは思わず苦笑いした。しかしすぐに神妙な面持ちでこう答えた。

「この二人は重要な鍵になると思った、それだけさ。特にこれからのパラディ島での交渉ごとに彼らは必要不可欠だと判断した」

「はあ……」

ジークの発言に彼らは無理やり納得させることとした。

こうなってしまうてはどうしようも無い。そもそも上官からの命令である以上、作戦

に疑問を抱き問うことはできてもそれに逆らうことはできないのだから。

そのため、本人たちは何も考えずに任務を遂行しようと心に決めたのだった。

「それに、見てごらん。ひでの周りを…彼を中心に仲間が結束しているじゃないか！今
までどこかよそよそしかった君たちが、ひでのおかげで仲良く親交を深めているじゃな
いか！」

「まあ、そうですね…」

マルセルはひでのほうに目をやる。

「おい、ひで！いい加減口を慎め！」

「もうここまで来たんだから諦めんよ！」

「文句ばつか言ってるじゃ無いわよ！」

「ぬわあああああん！疲れたもおおおおやだあああああ！」

「うっさいひで!!」ボコツ

「いたいたいいたい！あああああ!!」

気がつけば、さっきまでいたベルトルトとピークがひでのほうにいた。

ライナーとベルトルトとピークとゆうさくがひでを必死に励まし？罵倒しつつ、アニ
はひでに蹴りを入れている。まさしくひでを中心に皆一丸となっているようにも見え
る。

「なんだかなあ……」

とマルセルは思った。

ところ変わって、マールレにあるクツキー軍が占領している本部

「あのさ、イワナ……書かなかったけ？パラディ島の壁の中を征服するって！」
「(言って) ないです」

空手部3人の向かいにいる人物、それは上司でもありクツキー人の宇月である。

本来ならば彼らの上司という器ではないのだが、クツキー人ということもあり、彼らより階級は上である。

宇月は、手元にある書類を見ながら一瞥すると、手元のコーヒーを蕎麦つゆを飲み、一息つく。彼女の書類の内容はいわば、田所たちへの命令書、そしてそれが失敗に終わったという始末書である。

田所たちが来たのはいわば威力偵察である。パラダイ島の戦力は如何程であるか、またそれがもしクソザコだったら征服する、これが彼らの目的だった。

彼ら自身、奴らは大したことねえ！当初は楽に終わるものと考えていて、甘い見通して出陣した。しかし彼らの予想は大幅にはずれ、調教師タクヤというイレギュラーの存在によって作戦は失敗に終わる。おまけに連れてきた巨人兵の大部分を失ってしまうというという大失敗だ。

「田所ちよつとー!!私さあ上司のTISに、今度こそ失敗しませんって言ったんだよね?どうしてくれんのこれ?」

宇月が机をバァン!と叩く。

「あ、おい待てい!それ俺たちの責任じゃ無いゾ、言ったのは自己責任ゾ」

「もし失敗したら…:ネットに晒すぞって言われてんだよね…。どう責任取ってくれんのこれ?」

「なんで僕たちが責任取る必要なんかあるんですか？」

「ていうかそんなんだつたられうさんに仲介を頼んで、おばさん許して……してもらえばいいじゃないですか？」

「いや、れうさんはちよつとー！仲良くな^くはないんだけど……嫌いじゃ無いけど好きじゃないみたいな……」

なんかめんどくさ、と空手部は思った。

「ともかく！次は失敗すんなよ！わかった!？」

「「かしこまりー!」」

空手部3人の威勢の良い返事イ！に頷くと、今度は別の紙を取り出す。新しい指令についでかかれている。

部下の失敗をあまりしつこく追求しない、まさに上司の鑑である。

「よし！じゃあ次の指令なんだけど、今から2ヶ月後に、マール軍の第七支部を襲撃するからー!」

「え！マール軍の第七支部ですか？さすがにキツくないですか？」

宇月の命令に木村が異をとる。

「マーレ軍第七支部といえは、マーレの中でも指折りの師団が揃ってるところだぞ。俺たちが出たところで返り討ちに遭うのは想像できるゾ？なんでまた俺たちに？」

「私も知らないんですがそれは!!でもまあうーんなんでも、ここには普段姿を見せないマーレ軍の元帥でもあるマガトが視察に訪れるらしいから、今のうちに叩いておきたいんだとさ」

「ええ…じゃあますます厳しいじゃないすか」

敵の総大将が来るんじゃ、こんなんじや勝てるわけないだろ!と3人は怒りをあらわにする。

「まあ、大丈夫だつて!安心してよ!!我々の他に部隊がいくつも参加するし、そして、マーレ軍のかんな大将や、るりま少将が参加されるらしいからな…」

宇宙の発言に3人は目を合わせる。それだったら、まあ。という感じである。

こうして3人は2ヶ月後のマーレ侵攻作戦に向けて準備を開始するのであった。

ところ変わってとある病室。

先日の巨人との戦いに傷を負った人たちが多く入院するこの病院の一室に、一人の男を中心に多くの人が彼の周りを囲っていた。

病室内部の壁際には垂れ幕があり、そこには回復祝いの文字が並べられていた。

「タクヤさん、回復おめでとうございます!!」

エレン、アルミン、ミカサが一斉いうと、ミカサからタクヤに花束が贈呈された。タクヤの回復祝いということで、集まってくれたのだ。

また集まったのはなにも3人だけではない。

エレンの両親や、アルミンの祖父、そしてハンネス、街の住人が何人か集まってきた。彼らの共通点は、全員がタクヤに命を救われたことだ。

今日という日は、タクヤという恩人が退院する日であり、そのため居ても立っても居られず、集まってきたのだ。

タクヤはこういう状況に慣れていないため、照れ臭かったのだが、ほおをかいていたが、やがて全員にひとりひとりに向かってありがとナスと声をかけた。

やがてしばらく彼らと談笑し、じゃ参るかと帰る支度をしていると、

「ほほほ、どうやら面白いことになっていきますね〜」

そう言いながら、タクヤの病室に一人の男が、ガチャリとドアを開けて入ってきた。

「あ、店長！」

タクヤが店長と呼んだ人物、平野源五郎が現れる。

彼はタクヤの上司でもあり、現在はエレンたちが憧れる調査兵団の副団長をしている。

思わぬ平野の登場にエレンは直立不動で、緊張の面持ちを見せる。エレンの見たことのない姿に思わずアルミンは笑いが出そうになるが、グツとこらえる。

そんなエレンの様子に気づいたのか、平野はエレンに近づき、彼の肩をポンと叩き、緊張しなくてもいいんだよとおどけた口調で声をかけ、彼の緊張をほぐした。

普通調査兵団のナンバー2ともあれば、多くの人が緊張したり畏敬の念を抱かれたり、エレンのように固まってしまふのだが、今の街の人たちの様子からはそれが感じられない。

それはただ単に、彼らがある程度顔馴染みということもあるが、平野自身様々なコスプレをしたり下ネタを言ったり親しみを持って話しかけたりと、ムードメーカーとして接してきたためであった。

「店長遅いつすよ！もう始まつてんだよなあ〜」

「悪い悪い、仕事を立て込んでいてな。まつたくこれから用事があるというのに、あの仕事量……このハゲ〜！」

平野は遅れてきたにも関わらず、悪びれる様子はない。

だがどこか許してしいたくなるようなオーラを持つ不思議な人である。依然としている平野の様子にタクヤは、相変わらずだなど笑った。

ちなみにハゲとはエルヴィンのことである。毛が薄くなつてることから、彼に何かされる、決まつてハゲと呼んでいる。

エルヴィンにハゲ呼ばわりなもんだから、周りもヒヤヒヤである。

街を救つた英雄とあれば、なにもタクヤだけでなく、駐屯兵団や憲兵もいた。彼らもタクヤほどではないにせよ十分活躍していたし、大怪我を呈して街の人を守つた人やなんなら殉職者だつて出ている。

しかしどれほど大怪我をして、入院し退院し、祝われたとしても、これほど盛大になおかつ多くの人が集まるのはタクヤぐらいだろう。

それはやはり彼の為せるオーラや人柄、キャラクターの強さだろう。

多くの人は、彼の変態チックな出立ちの、街を救った英雄らしからぬ姿から、最初は驚きつつも現在はそれを受け入れ？ている。しかし股間のモッコリを強調したズボンはやめて貰いたいとみんな思っているが…。

みんなに囲まれてあーだこーだしているたくやを一人の少女が見つめていた。エレン達と同年代でありながら、看護師として、タクヤの看護にあたっていたクリスタという少女だ。

彼女はみんなに囲まれ和気藹々としているタクヤを羨ましそうな目で見つめていた。しばらく見つめていると、今度は男の人に話しかけられているのに気づいた。自分よりも背の高い男性である。見上げると、先程遅く入ってきた平野という男だ。

「僕の名前は平野、君の名前は？」

「あ、えつと私はクリスタです」

お互い自己紹介から始まった。

「僕はタクヤの友達の平野！君はクリスタ君！ほらもう知らない人じゃなくなったね！」

「は、はあ……」

なんだろうこの人は？とクリスタは思った。

威厳？のある先程までと違い、明らかに不審者っぽく、キモオタっぽい喋り方で一気に警戒するクリスタ。

「いや、急に話しかけて悪かったね。…君がタクヤに見つめる目が他とどうも違っていてね。気になったんだ」

「……」

（当たり前だ。この人は他人をよく見てる。これが調査兵団の副長となると違うのかしら……）

続け様に平野が口を開く。

「君はタクヤを羨ましがってる、そうだね？」

「………はい」

そう言うときクリスタは平野から再び、タクヤに視線を移す。

「今日沢山の方がタクヤさんの周りに集まりました。…いや今日だけじゃありません。入院中も何人もの人が足を運びました。こんなにも愛されているんだなって……。それ

はずごいことなんだなあって…」

「……………」

「それは、やっぱり、タクヤさんや平野さんが立派な方だから、人が集まるんだと思う
です」

「……………」

「一方の私は全然立派じゃない人間で…」

「君は立派だよ。現に多くの人の看護にあたった。」

「いいえ…全然ですよ。それに……………私は誰からも愛されない」

「……………」

「こんなこと言うのも失礼なんですけど、どうしてもタクヤさんと自分を比べてしまっ
ます。自分が入院したときとか、もしくは葬式とかこんな人に人は来てくれないだろ
うなって…。だから、どうしても羨ましいなって、タクヤさんが…」

「葬式とか、縁起でもないこというね…。」

「…」

「でもね、君は多くの人に愛されるよきつと。」

「うそ、信じない」

「おそらく今はまだ出会っていないだけだよ。君のことを大切に愛してくれる人は必ず

現れる…」

「そんな…だって、私は母や父にも、家族からも愛されたことないんですよ？」

はっと、言い終わった後でクリスタは後悔した。先ほど出会った人に、なぜ自分の話をこんなに打ち明けてしまったのか…。気づけばこんなにも喋ってしまった。

「なるほどね、君がそこまで悲観的なのか、わかった気がするよ」

「…っ。」

「クリスタ君、君は自分はタクヤとはまったく違う人だと考えているようだけど、それは違う。私が思うに君とタクヤは似ているよ」

平野の言葉にクリスタは目を開ける。

「それは、どういうことですか？」

「私の方からは言えない…。詳しくはタクヤ本人から聞いてくれ」

「…」

そう言うと平野はクリスタの元を離れ、タクヤの方に歩いて行った。

(私とタクヤさんが似てる…?)

平野が言ったことをクリスタは理解できなかった。多分自分を励ますために嘘をついたのだろう。そうクリスタは思うことにした。

（クリスタ君、君には私の言っていることを分かっているか？はいないだろう。君は私たちを立派な人だと考えているようだが……私たちは君の思うような立派な人達じゃない。ホモビ俳優は日陰にいる者なんだ。ニコニコや淫夢厨という人たちのおかげで私たちは表の舞台に立てたに過ぎない。少し前なら放送事故だった私でも、普通にテレビに出てこれるし、特にタクヤはA'sのギタリストや漫画家としてたくさんの人から愛されている……。君にもそう言う人は見つかるさ………多分）

おまけ

「つかよお、アルミンにミカサお前らよく平野さんに緊張しなかったよなあ」
「調査兵団の連中にあんなに緊張するのはエレンだけ」

「な!? お前らがおかしいんだっつーの!」

「ははは…。でも最初は僕も緊張したなあ。でも話してみるとすごい気さくな人なんだよね」

「ん? ちょっと待てアルミン!?!: お前あったことあんのか!?!」

「あったも何も、その時一緒に居たじゃないか」

「エレン、あなた覚えてないの?」

「え!?! いやさすがに: でもアルミンは嘘つかないからな…。俺も一度あったんなら覚えてるはずだけど…」

「ああ、もしかしたら今と格好が少しだけ違うからかな?」

「え?」

「ほら前にあったじゃない? メガネかけたおかつぱ頭つぽい、独特な喋り方の!」

「えーと: …: …: あー!?! 思い出した!」

「かわいいいなああああエレン君!!」

「: …: …: つて!! あのキモいおっさんなのかよ!!」

「ちよ、エレン」

